

---

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1948年(女)
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	えんずのわり参加の子どもの祖母、漁業・海苔養殖・
補助調査者	大沼 知		民宿業

---

### 今年のえんずのわり行事について

これまで大将は中学生だったが、今回は小学生3人だけだった。今年は本当ならもう1人、小学1年生が入る予定だったが、震災で地区を離れてしまった。また、高校生の先輩たちも月浜の仮設にいなかった。そういったことで不安があったと思うが、本人たちは3人とも、行事をやりたいと言っていた。

今までは、上の者(中学生)から指示されてやっていたのが、今回は誰も指示をしてくれない。前回の行事で、一番大将から色々教えてもらっていたらしいが、とくに準備の段階で、いつ頃、どんなことをする必要があるのかがわからなかったらしい。準備や道具作りは、保存会や親たちがある程度手伝った。幸い、料理などに使う薪は流されなかったのので、それを岩屋の2軒となりの洞穴に置いておき、そこから取れば良いようにした(本来は、神社拝殿の裏に薪を用意してあり、そこから取ってくる)。

いつもなら、年少の者は宿泊はしないが、今回は小学生3人しかいなかったのので、神社に泊まるのも難しいだろうということで仮設の談話室に泊まった。布団などは文化庁の補助で購入した。子どもたち自身は、たいへんだということよりも、一緒にいられることが嬉しかったようだ。部落の総会のときに、保存会の人がまず子どもたちに、今年の行事をどうするかと聞いたら、すぐに「やる」と答えたほどで、楽しみにしていたようだ。

今回はとくに、浜に家がなくなってしまったことで、ボラの周囲が暗く、また浜の風が吹いてくると真っ向に当たるので、寒かろうということを心配した。

水は、以前はうちの民宿の玄関の水道と、神社の前の井戸の水を使っていたが、それが壊れてしまって、少し離れたところに住人の一人が作った水道から水を運んだ。子どもたちにはたいへんなので、うちのおじいさんともう一人のおじいさんが、レンタルの水を入れて、岩屋まで車で運んだ。その水も外に置いておくと凍ってしまうので、樽のまま中に入れて、朝はその水を使っていた。

子どもたちの父親は外に仕事に行っていて、帰ってくるのが遅くなるので、祖父が色々面倒を見ていた。ただし普段は子どもたちだけでやる行事で、大人は全く手伝わない。普通の年だと、年少の子どもたちが、宿泊している大将らを朝に起こしに来るが、今回は子どもたち3人が一緒に宿泊しているので、子どもたちの母親が毎日子どもたちを起こすことになり、母親はそのためになんげ宮戸小学校の仮設住宅からこちらの仮設住宅に来ていた(A氏・B氏の家族は、通学の関係で、月浜ではなく宮戸小学校の仮設に入居している)。母親たちは岩屋にも入れないので、

直接教えられずもどかしいところもあったらう。

祖父らは、海苔養殖などに使った古い竹を短く切って叩いて潰し、子どもたちと一緒に焚き付けを作った（本来は杉の葉などを使う。薪で火をおこすのは、火力が安定するのに時間がかかるので、一気に火が付く竹を使った方が良さだろうと祖父らがアドバイスした）。その時でも、子どもたちは上手く鉋を使っていて、今まで先輩にならってきたことが生きていると思った。

### 民宿業の再興について

民宿を継続するためには、高台移転をしたところに、自宅用以外に多少なりとも土地を確保しなければならない。そのような土地が得られるなら民宿も再開したいと思っている。浜に民宿を建てるには、盛り土をして県や国の審査を通らないといけないと聞いている。その費用は相当かかるらしい。また、自分たちは高台に住んでいて、お客さんだけを津波が来たようなところに泊めることはできないと考えている。

移転先の宅地となる用地はだいたい見当が付いている。そのなかで、今まで民宿をやっていた家がすべて民宿を再開するのは難しい。民宿再開の希望が少なければ、その土地を確保できるかもしれないと聞いている。市の方にも聞いているが、もう少し待つて欲しいと言われている。

旦那さんは民宿を再開したいと強く希望している。自分たちのような年齢になると、外に働きに行くことはできないし、かといってこのまま何も仕事をせずに余生を過ごす年でもない。

再開する資金に関しては、商工会などが主催する補助金の説明会などにも出たが、まだ具体的なところまでは考えていない。その説明会では、民宿もグループで経営するような方式が出されていたが、民宿でそれは難しいと考えている。

旦那さんは、これまでの民宿のお客さんに、今回の震災に関して色々世話になったので、できるだけ早く再開して、恩返しとして、少しでも早く、再開した民宿に招待したいと考えている。

息子（震災前は話者夫婦と一緒に民宿経営）は海苔養殖の協業グループにも入っているが、それも一年中・毎日の仕事ではない。民宿が再開できれば、孫たちの母親も外に働きに出ず家にいられるので、家族揃って生活ができる。

### 震災後の生活について

旦那さんは、震災後の一時期、友人を頼って外に仕事に通っていたが、息子も外で働いていて、2人ともここ（月浜）にいないと、この情報が入ってこない。それで外の仕事をやめて、11月から地元の瓦礫撤去作業をするようになった。部落の中でもざっくばらんな世間話などはよくしているが、大事なことは自分から情報を得なければならないので、ここにいることが必要である。

### 女性たちの組織

かつては婦人部や若妻会などがあったが、自分たちが40歳くらいで抜けた頃からなくなってしまった。今は嫁姑問題などないが、昔は姑さんとずっと家にいるのは気が休まらなかったので、同世代のグループがあった。自分たちは若妻会を抜けた後、椿会というグループ（現在55歳～65歳くらいまで）を作って、近くの温泉と一緒に旅行に行くなど親しくしており、今回の震災

でも助け合った。自分たちの5歳くらい年長の女性たちも、別にグループを作っていて、よく遠方まで旅行に行ったりしていた。そちらのグループは年齢が高くなって自然消滅したようだ。

他に山の神講と観音講がある。昔は観音講が嫁さんたち、山の神講（西と東に分かれている）はお婆さんたちという感じだった。今はどちらを拜んでも良いようになっている。自分は両方に参加している。1月12日が山の神講の日で、1月18日が観音講だった。昔は講の宿を決めて、ご馳走などを用意していたが、民宿を経営する家が増えて忙しくなると、旅館などを借りてするようになった。

それぞれの講の集まりのときに使う掛け軸があったが、津波で流されてしまい、山の神講の掛け軸が1つだけ残った（山の神講の1つと観音講が、震災時に偶然にも同じ家が当番になっており、一緒に流されてしまったらしい）。今年は1月12日に、残った掛け軸を、宿の当番の人が（仮設の）公民館にかけて、山の神講と観音講を一緒に行った。洗米と塩と水と幣束と蠟燭を供えて拝み、それからバスで出発して、途中道の脇にある山の神をお参りして、大観荘に行ってきた。

講の当番は、西の一番端からはじまって回す順番が決まっていた。部落内には、ツメバン（詰番 / 詰板？）といって、市からの回覧物などを部落内に配布するための役割が順番で回っており、ツメバンの家には板（札）をかけ、一度役目が終わるとその板を次の順番の家に戻す。講の当番もそれと同じ順番で回っていた。

部落の総会である伊勢講もこの順番で回っているが、伊勢講の場合は3軒一組で当番を担い、終わると次（4番目～6番目の家）に戻していた。この場合、当番3軒のうち一番若い順番の家を一番トエ（当家 / 当屋？）といって、その家で神様を受けとり、自分の家の神棚に上げる。伊勢講は年に2度（1月21日と8月21日）あるが、1回ごとに当番を回す。